

クラシック音楽講座

第9講 近代音楽の始まり

フォーレ ドビュッシー サティ ラヴェル スクリャービン

講師：佐藤卓史

2024年3月10日（日） 小手指公民館分館

ドイツ・ロマン派が分裂の末に行き詰まり、周辺国にその熱気が伝播していった頃。革命の混乱から立ち直ったフランスで、まったく新しい音楽の潮流が始まる。長かった「調性音楽の時代」がついに終焉を迎えようとしていた。

【19世紀の音楽】※これまでのおさらい

前期ドイツ・ロマン派（**シューベルト**(1797~1828)→**シューマン**(1810~1856)など）

中期ドイツ・ロマン派（**ヴァーグナー**(1813~1883) vs **ブラームス**(1833~1897)）

国民楽派（1840年代以降に生まれたロシア、東欧、北欧の音楽家たち）

【フランスの音楽と政治の歴史】

中世アルス・ノーヴァ時代の**マシヨ**（1300?~1377）、ルネサンス期の**ジョスカン**(1450/55?-1521)、バロック時代の**クーラン**(1668~1733)、**ラモー**(1683~1769)ら時代を代表する作曲家を生み続けていたフランスだが、古典派の時代には特筆すべき音楽家はいない。社会の激動で音楽どころではなかったのか？

1789年の**フランス革命**（大革命）で共和政（第一共和政）を打ち立てるも、1799年に全権を握った**ナポレオン**が1804年皇帝に（第一帝政）、1814年に失脚（復古王政）。1830年七月革命（七月王政）、1848年二月革命（第二共和政）、1851年12月2日のクーデター（第二帝政）と目まぐるしく政体の変動し、1871年の普仏戦争の敗北、パリ・コミュンを経て**第三共和政**が確立。ようやく社会は安定したが1914年に**第1次世界大戦**に突入。新たなフランスの音楽は19世紀の後半に花開くことになる。

コンセルヴァトワール（パリ音楽院） 1669年ルイ14世によって設立された王立アカデミーを母体とし、革命下の1795年に音楽院として改組。世界初の国立の音楽専門教育機関で、各時代の錚々たる音楽家が指導陣に名を連ねるが、教育方針は極めて守旧的。現在の正式名称はパリ国立高等音楽・舞踊学校。

ローマ大賞 1663年に創設された若手芸術家のローマ留学制度。受賞者は奨学金を得てボルゲーゼ庭園内ヴィラ・メディチに3~5年程度滞在し研修と創作に専念する。当初は美術部門のみだったが1803年に音楽（作曲）部門が追加された。若手の登竜門とされるが、後に活躍できなかった受賞者も多い。審査にあたるパリ音楽院の教授陣、芸術アカデミー会員（他の芸術分野の権威）の保守性がたびたび批判され、1968年に一旦廃止された。

【19世紀フランスの作曲家たち】

自らの失恋・自殺未遂体験を基にした「幻想交響曲」で知られる**エクトル・ベルリオーズ**(1803~1869)はロマン主義音楽の先駆者で、管弦楽法に長け、巨大なオーケストラから引き出す大音響で人々を驚かせた。

ベルギー生まれの**セザール・フランク**(1822~1890)は教会オルガニスト出身で、晩年に創作活動を本格化。ドイツ・ロマン派の対立軸を融合させる堅固な作風で、ダンディ、ショーソンら門人たち（**フランクリスト**）から篤い尊敬を集めた。代表作に「交響曲 ニ短調」「ヴァイオリン・ソナタ イ長調」など。

多分野に天才を発揮した**カミーユ・サン＝サーンス**(1835~1921)は古典に通じ、初めリストの標題音楽派に呼応。やがてフランス国民音楽の創生を目指し1871年に**国民音楽協会**を設立。晩年は超保守化し、新世代の音楽への無理解を公言。作曲技術は一流だったが創造性を欠き、多作の割にインパクトのある作品は少ない。代表作に歌劇「サムソンとデリラ」、交響曲第3番「オルガン付き」、組曲「動物の謝肉祭」など。

ガブリエル・フォーレ (1845.5.12. パミエ～1924.11.4. パリ)

《概要》ニデルメイエル宗教音楽学校で学び、教会オルガニストを歴任。教会旋法を採り入れた機能と声の拡張を試み、独自の豊潤で色彩的な音響世界を構築。門下生ラヴェルのローマ大賞落選をめぐる「ラヴェル事件」(後述)を受けて、非出身者ながらパリ音楽院院長に就任、教育方針の大改革を断行。後年難聴を患い、狭い音域内での線的な書法へ作風を転向。晩年には政府主催の記念式典が開催されるなど国民的尊敬を集めた。

《キーワード》**教会旋法** グレゴリオ聖歌の時代からルネサンス期まではさまざまな音組織(≡音階)が混在しており、後に6つの旋法(ドリア、フリギア、リディア、ミクソリディア、エオリア、イオニア)に整理された**[譜例 1A~C]**。このうちイオニアは長音階(長調)、エオリアは自然短音階(短調)として発展したが、それ以外は古様式として半ば封印された。ルイ・ニデルメイエル(1802~1861)のもとで単旋聖歌への和声づけを学んだフォーレは少年期から教会旋法に親しみ、そうした古い素材を調性音楽に再移植することによって、多彩かつどこか古風で不思議な響きを湛えた、新たな音楽を生み出すに至った。

《主要作品》

〈舞台音楽〉オペラ『ペネロプ』、**付随音楽『ペレアスとメリザンド』**(「シシリエンヌ」)**[譜例 2]**

〈ピアノ曲〉夜想曲 全13曲、舟歌 全13曲、主題と変奏、即興曲 全6曲、組曲『ドリー』(連弾)など

〈室内楽曲〉ピアノ五重奏曲 2曲、ピアノ四重奏曲 2曲、ヴァイオリン・ソナタ 2曲、ピアノ三重奏曲 Op.120、弦楽四重奏曲 Op.121(最後の作品)など

〈歌曲〉**夢のあとで Op.7-1、月の光 Op.46-2 [譜例 3]**、歌曲集『優しい歌』Op.61、歌曲集『イヴの歌』Op.95、歌曲集『幻想の地平線』Op.118 など多数

〈合唱曲〉**レクイエム Op.48**、パヴァーヌ Op.50 など

クロード・ドビュッシー (1862.8.22. サン＝ジェルマン＝アン＝レー～1918.3.25. パリ)

《概要》ピアノから作曲に転向。ヴァーグナーへの心酔からほどなく離れ、パリ万博のガムランに魅了され非西欧的語法を探求。『**牧神の午後への前奏曲**』で色彩的・空間的な独自の音楽世界を確立した。フォーレの旋法主義を推し進め、新たな音組織「全音音階」を多用、初めて調性から完全に逸脱した作曲家の一人となる。急進的な作曲家として保守派から忌避されたが、晩年にはフランスの伝統を意識し、明確で直截的な表現を目指した。

《キーワード》**印象派** 元は絵画の用語で、19世紀後半に活動したモネやルノワールらの革新的な画家の一派を指す。同時代のドビュッシーの音楽にも、彼らの絵画と似た**柔らかな色彩感や夢見るような雰囲気**が感じられることから「印象派」(印象主義音楽)の代表者とされる。ただし本人は印象派美術には共感せず、自らはむしろ「象徴派」であると主張している。歌曲における詩人の選択や、晩年の作風には象徴主義への接近が見てとれる。

パリ万国博覧会(1889) フランス革命100周年を記念して開催、モニュメントとしてエッフェル塔が建設された。最新の工業技術を駆使した機械館や白熱電灯による夜間会場、広大な敷地を周遊できる特別鉄道が敷設された一方、植民地などの世界の民俗文化の紹介も行われた。ドビュッシーはここでバリ島(インドネシア)の民俗音楽**ガムラン**を聴き、西洋音楽とは全く異なる音響に魅了される。後に黒人音楽(ケークウォーク)の語法を採用したり、日本の浮世絵版画を蒐集するなど、異文化への興味は生涯失われることがなかった。

全音音階 隣り合う構成音どうしの音程関係がすべて長2度(全音)となる、6音からなる音組織**[譜例 4]**。調性の基礎となる完全5度の音程を持たず、どの音から開始しても相似形となるため主音すら確定しない。存在は古くから知られていたが、ドビュッシーは意図的に多用し、**無調音楽**に至る足がかりとした。実際には他の旋法も多く併用され、独特の**茫洋たる音響世界**を創り上げている。

シュウシュウ 私生活では数多くの女性問題を抱え、青年期にはチャイコフスキーのパトロンとして有名なメック夫人にピアニストとして雇われるも娘に手を出して解雇。最初の結婚時には別の交際相手が自殺未遂、結婚した妻リリーも夫と銀行家夫人**エマ・バルダック**との不倫を苦に自殺を図る。この事件は大スキャンダルとなり、不倫の二人はイギリスへ逃避行。やがてエマとの間に生まれた一人娘**クロード＝エマ**を、ドビュッシーはシュウ

シュウ (Chouchou、キャベツちゃん) と呼び溺愛、彼女のために「こどもの領分」を作曲。後にバルダックと正式に結婚するが、愛娘シュウシュウはドビュッシーの死の翌年に 14 歳で夭逝した。

《主要作品》

〈管弦楽曲〉 **牧神の午後への前奏曲**(1892-94)、夜想曲(1897-99)、**交響詩『海』**(1903-05)

〈舞台音楽〉 **オペラ『ペレアスとメリザンド』**(1893-1901)、劇音楽『**聖セバスティアンの殉教**』(1911)など

〈ピアノ曲〉 多数

2つのアラベスク(1888-1891)、ベルガマスク組曲(1890)、ピアノのために(1901)、**版画**(1903)、**喜びの島**(1904)、**映像 第1集**(1905) [譜例 6]、**同第2集**(1907)、こどもの領分(1906-08)、**前奏曲集 第1集**(1909-10) [譜例 5]、**前奏曲集 第2集**(1910-13)、12の練習曲(1913-15)、白と黒で (2台ピアノ) (1915)

〈室内楽曲〉 チェロ・ソナタ(1915)、ヴァイオリン・ソナタ(1917) (最後の作品)

エリック・サティ (1866.5.17. オンフルール～1925.7.1. パリ)

《概要》パリ音楽院の教育方針が肌に合わず自主退学、反アカデミズムを貫く。モンマルトルの酒場でピアノを弾きながらさまざまな芸術家と交流。小節線や調号を廃止、風変わりな題名を連発し、既存の音楽の概念を破壊・拡張するアヴァンギャルドな作風に至る。保守層からは異端児として無視されたが次世代に与えた影響は大きく、後継者を自認する若手たちが「フランス六人組」を結成。コンセプチュアルな創作姿勢は 20 世紀の「実験主義」の直接的な先駆と考えられている。

《キーワード》 **家具の音楽** 家具のように日常生活に溶け込み、意識的に聴かれることのない音楽。サティの作品全体を貫くアイデアとして本人が語った言葉であり、晩年に発表された同名の室内楽曲では無限の反復が指示されている。現代の環境音楽や背景音楽 (BGM) への繋がりが指摘されている。

《代表作》 いずれもピアノ曲

3つのジムノペディ 緩慢な舞曲風の小品集。題は古代ギリシャの裸祭りに由来するというのが詳細は不明。

6つのグノシエンヌ パリ万博で聴いたルーマニア音楽の影響が指摘される。題は造語で意味は不明。

ヴェクサシオン (嫌がらせ) 小節線のない 52 拍のコラール風の音楽だが、「840 回の反復」が指示されている。

《他にもまだある、奇妙な題名の作品たち》

薔薇十字団の最初の思想、ゴシック舞曲 (副題「我が魂の大いなる静けさと堅固な平安のための 9 日間の祈祷崇拜と聖歌隊の協賛」、天国への英雄的な門への前奏曲、冷たい小品、新・冷たい小品、梨の形をした 3 つの小品、壁紙的前奏曲、馬の装具で、〈犬のための〉ぶよぶよした前奏曲、〈犬のための〉ぶよぶよした本物の前奏曲、自動記述、干からびた胎児、あらゆる意味ででっかあげられた数章、でぶっちょ木製人形へのスケッチとからかい、古い金貨と古い鎧、嫌らしい気取り屋の 3 つの高雅なワルツ、官僚的なソナチネ … などなど

モーリス・ラヴェル (1875.3.7. シブール～1937.12.28. パリ)

《概要》パリ音楽院でフォーレに師事、若くして頭角を現すが、ローマ大賞に 5 回落選し大騒動に (後述)。初期には印象派の一員と目されたが、やがて新古典主義的作風に転じる。緻密な技術に裏打ちされた完成度の高い書法、特に管弦楽法においては他の追随を許さない。民俗音楽やジャズなど既存の音楽語法を採り入れたイミテーションにも長け、職人技を発揮。第 1 次大戦従軍以降寡作になり、脳障害により晩年は作曲不能に陥る。

《キーワード》 **ラヴェル事件** 1901 年の『水の戯れ』 [譜例 7] で衝撃的なデビューを飾るが、この年 2 度目のローマ大賞に挑戦するも第 3 位に終わる。その後も落選が続き、1905 年の 5 度目の応募では予選すら通過しなかった。既に有名だったラヴェルの予選落ちに対して、ローマ大賞そのものの価値に疑念を呈する世論が生まれ、権威主義への批判が巻き起こる。パリ音楽院院長のテオドール・デュボワは辞任に追い込まれ、後任に就いたフォーレ (ラヴェルの師) は教育方針の大改革を断行。カリキュラムの範囲を急進派ドビュッシーの音楽まで広げる一方、反対派の保守層を一掃、陰で「ロベスピエール」と呼ばれて恐れられたという。

スイスの時計職人 ストラヴィンスキーによるラヴェル評。その繊細緻密な書法と、どこか機械的・人工的な音楽観をよく言い表している。実際にラヴェルの父はスイス人で、その職人肌は父譲りともいわれる。一方で母はスペイン北部バスク地方の出身で、時折顔を出す熱狂と興奮は母方の血を受け継いだものだろう。

オーケストレーションの魔術師 30 段以上に及ぶ大編成スコアを統御し、音色のパレットを自在に操る手際は特筆すべきもので、音楽史上最大の管弦楽法の達人といわれる。編曲も得意とし、とりわけムソルグスキーのピアノ曲『**展覧会の絵**』はラヴェルによる管弦楽編で世界的な知名度を得た。

高次和音（テンションノート） 伝統的な和声学では不協和音とされる七の和音(7th)や九の和音(9th)を協和音に含めるフォーレの手法をさらに推し進め、高次の堆積音を伴う和音を積極的に用いた。古典的な和声進行でも斬新な響きを纏うことができる、この手法は後に大衆音楽に移植され、ジャズやポピュラーに定着している。

ダンディズム 小柄なラヴェルは常に一分の隙もないファッションで人前に登場した。志願して第 1 次大戦に従軍し、トラック輸送兵を務めるが負傷、同時期に最愛の母を亡くす。終戦後は創作ペースが極端に低下。1932 年に交通事故に遭い、失語症や認知症が急激に悪化。記譜法すら忘れ、脳手術の後に帰らぬ人となった。

《主要作品》〈管弦楽曲〉スペイン狂詩曲、**バレエ『ダフニスとクロエ』**、**ラ・ヴァルス**、**ボレロ** [譜例 8・9]

〈協奏曲〉左手のためのピアノ協奏曲、**ピアノ協奏曲 ト長調**

〈ピアノ曲〉亡き王女のためのパヴァーヌ、**水の戯れ** [譜例 7]、ソナチネ、**鏡**、**夜のガスパール**、

マ・メール・ロワ（連弾）、高雅にして感傷的なワルツ、**クーブランの墓**

〈室内楽曲〉**ピアノ三重奏曲**、ツィガーヌ（ヴァイオリン+ピアノ）、ヴァイオリン・ソナタ

【調性からの逸脱】

19 世紀のヴァーグナーやリストによる試みの後、20 世紀に入っていよいよ完全な無調音楽が系統的に生み出され、潮流となっていく。1910 年前後に、**ドビュッシー**、**シェーンベルク**、**スクリャービン**の 3 人の作曲家がそれぞれ別々の道筋で無調に到達する。ドビュッシーが用いた方法は、**全音音階**に代表される音組織の拡大。シェーンベルクは半音階主義を推し進め、後にシステマティックな無調作曲法「**十二音技法**」を考案する。スクリャービンは**神秘和音**という特殊な和音によって調性のくびきから逃れた。

アレクサンドル・スクリャービン (1872.1.6. モスクワ～1915.4.27. モスクワ)

《概要》モスクワ音楽院でピアノを学ぶも、手の故障から演奏を諦め創作活動へ。初期のピアノ曲はショパンの影響が濃い。ニーチェの超人思想やブラヴァツキーの神智学に傾倒し、その神秘体験の再現を目指す中で「**神秘和音**」を発見、調性から逸脱する。自らの共感覚を現実投影する「色光ピアノ」を考案するも実現前に急死。

《キーワード》**左手のコサック** モスクワ音楽院ではラフマニノフと同級で、好敵手として競い合った。作曲の師アレンスキーとはそりが合わず、演奏家としての将来を嘱望されていたが、友人たちとの超絶技巧対決で右手を痛めてしまう。その間に左手の技巧の可能性を追究し、左手の極端な運動性を要求するピアノ曲を多数発表。

神秘和音 和音の自然倍音発生説を推し進め、高次倍音を還元した 6 音からなる和音 [譜例 11]。通常の 3 度堆積とは異なる 4 度堆積の形を示す。精神的法悦（エクスタシー）の神秘性を表現するとされ、この和音の多用によって調性からの脱却を成し遂げた。

色光ピアノ スクリャービンは音を聴くと色を感じる「色聴」という共感覚の持ち主だった。「色光ピアノ」はその感覚世界を表現するために考案された楽器で、鍵盤を押すと音と同時に色の照明が発せられるという趣向だった。交響曲第 5 番『プロメテ-火の詩』のために開発されたが、初演では故障して使用されなかった。その後実現はしていないものの、作曲者の意図を汲み取った照明演出はたびたび試みられている。

《主要作品》〈ピアノ曲〉ピアノ・ソナタ全 10 曲（第 2 番『幻想』、第 5 番 [譜例 10]、第 9 番『黒ミサ』など）、

12 の練習曲 Op.8、24 の前奏曲 Op.11、前奏曲・詩曲などのタイトルの多数の小品

〈交響曲〉第 3 番『神聖な詩』、第 4 番『法悦の詩』、第 5 番『プロメテ-火の詩』

譜例 1A 6種の「教会旋法」とその名称

譜例 1B 全旋法の主音をCに揃えると

譜例 1C 1Bを#→♭が多い順に並べ替えると

譜例 2 フォーレ：シンリエンヌ Op.78 として単独で出版後、「ペレアスとメリザンド」組曲に流用。ト短調だが第6音にミ♭ではなくミ♯をとる（○内）。ドリア旋法の使用により、独特のアルカイック（古風）な明るさがもたらされる。

譜例 3 フォーレ：月の光 Op.46-2 冒頭のピアノの前奏。変ロ短調だが第6音がソ♭ではなくソ♯（○内）のドリア旋法。旋律ではなく和声（バス）に旋法を用い、やはり古風な趣を醸しているが、第3小節ではソ♭が現れて通常の変ロ短調に戻る。このように調性音楽の中に部分的に旋法的素材を挿入するのが中期までのフォーレの特徴。

譜例4 全音音階 隣り合う構成音どうしがすべて長2度(全音)となる6音の音組織。第4音まではリディア旋法、以降はエオリア旋法(自然短音階)の第6音以降の混合と考えることもできる。原理的に移調がほぼ不可能(無意味)で、12平均律上には2種類しか存在しない。



譜例5 ドビュッシー：前奏曲集 第1集～第2曲「帆」 ドビュッシーのトレードマークともいえるべき「全音音階」の全面的な使用例。

Modéré (♩ = 88)

(Dans un rythme sans rigueur et caressant.)



譜例6 ドビュッシー：映像 第1集～第1曲「水の反映」 光の乱反射を描いた「印象派音楽」の代表作。

Andantino molto

(Tempo rubato)



譜例7 ラヴェル：水の戯れ ラヴェルが音楽院在学中に作曲した出世作。ドビュッシーの「水の反映」に先駆けて発表された。自然な水の移ろいを描くドビュッシーに対して、ラヴェルは完璧に制御された水(噴水)の様態を表現しており、作曲家の個性の差が際立っている。連続する高次和音のアルペジオは、サン＝サーンスの耳には「全くの不協和音」にしか聞こえなかった。

(♩ = 144) Très doux



譜例 8 ラヴェル：ポレロ 主題 A 規則的なポレロのリズムの上で奏される単純なハ長調の旋律。

譜例 9 同 主題 B ミクソリディア、フリギア、旋律的長音階などさまざまな旋法が複雑に組み合わされている。音域も格段に広い。

譜例 10 スクリャーピン：ピアノ・ソナタ第 5 番 Op.53 より 神秘和音を基調とした和声進行

譜例 11 スクリャーピンの「神秘和音」の構造
長10度 長16度

調性の崩壊とともに、“ロマン派”の夢と憧れは終焉の時を迎える。

「よすが」を失った 20 世紀の音楽はどこへ向かうのか？

新大陸、そしてわが国の作曲家たちの挑戦と活躍を紹介する最終年度もお楽しみに！